

【古代後期部門】

0803 教室 一〇時半開始

「色好み」の男たち

——『伊勢物語』から『平中物語』へ

彭 健

本発表は、『伊勢物語』における主人公の「色好み」の造型に注目し、その成立と展開を再検討するものである。従来、「色好み」は人物の特徴として理解されてきたが、本発表ではこれを個人の性格ではなく、物語における人間関係の中で機能する人物類型として捉え直す。『伊勢物語』の「色好み」関係章段（五八段、六一段等）は必ずしも原初的章段に属するとは言いがたく、物語形成の過程で増補・再編された可能性が高い。これらの章段では、恋愛の成否よりも和歌の応酬や機知が重視され、人物は恋愛に情熱的に向かうというより、むしろ言語的機知

を發揮する存在として描かれる。このような特徴から、「色好み」的人物は言語遊戯を楽しむ存在として造型されていると考えられる。さらに、『平中物語』における平中の造型や『竹取物語』五人の求婚者との比較を通じて、機知を發揮して恋愛遊戯を楽しむ「色好み」の人物像が広く共有されていることを指摘する。

(名古屋大学大学院)

『源氏物語』光源氏によって象られる紫の上

関 加恵子

『源氏物語』第二部を対象に、紫の上は光源氏の絶対的な存在になり得たか、光源氏の時間を独占することができたかを論じる。

若菜上巻で光源氏は紫の上に最大級の賛辞を贈るが、それは、「御目うつ

し」と限定されたり、女三の宮容認の後に語られたりしたもので、相対的な評価であったことを論証する。幻巻の光源氏は、紫の上ひとりを想起し詠歌する。紫の上に向ける悲痛な叫びの如き心情を、歌のことばから抽出し、紫の上は、死後に、光源氏にとって絶対的な存在に再構成されることを検証する。

かつて紫の上は、光源氏と女三の宮の時間が増していくことを危惧したが、紫の上の発病後には、ひとりと寄り添い、死の直前まで片時も離れまいとした光源氏の言動から、紫の上は光源氏の時間を独占し得たことを論証する。

紫の上の憂愁は多く論じられてきたが、本発表では、巻を追って、紫の上の望んだ形で、光源氏によって象られるに至る過程を明らかにする。

(お茶の水女子大学大学院)

玉鬘と家族

——『源氏物語』竹河巻における大君
求婚譚を読み解く——

神原 勇介

竹河巻では、夫鬘黒の没後、大君の結婚について悩む玉鬘が語られる。結局、大君は冷泉院に参院するもの、求婚者の一人であった今上帝の不興を買い、これを咎めた子息達との口論の末玉鬘は閉口してしまう。この玉鬘の失策を端緒として、鬘黒一家は貴族社会での存在感を失っていく。先に触れた口論の場面で、子息達が、大君参院が成る前には玉鬘の決定を阻止出来なかった事実には注意される。玉鬘のように、既に成人した男子を擁しているがら夫亡き後の一家の舵取役を担う女性作中人物の類例は、僅少である。従来あまり問題にされなかったが、鬘黒亡き後の玉鬘の家中決裁権が如何なる根拠に基づいていたのかは不明瞭と言

える。鬘黒一家の没落が、他の誰でもなく玉鬘の失策という形でもたらされる竹河巻の物語展開には如何なる意義があったのか。本発表では、竹河巻を玉鬘物語の総括と見る立場に重点を置きながら、鬘黒一家没落の物語の意義を問うてみたい。

(佛教大学)

『源氏物語』薫の人物造型考

——今上帝女一の宮思慕をめぐって

吉田 彩乃

本発表は『源氏物語』「蜻蛉」巻に描かれる薫の今上帝女一の宮への思慕について考察する。物語の中で、薫は宇治の大君に強く惹かれ、その死後も執着を抱き続けてきた。女一の宮への思いが描かれることは、一人の作中人物としての造型上、あるいは物語の筋書き上も矛盾するように読める。本発

表が着目するのは、「蜻蛉」巻後半部、女一の宮への憧れとその尊貴性を思う文脈において、比較対象として薫の母である朱雀院女三の宮が想起されていることである。父帝からの寵愛を受けているという点ではわが母宮も決して劣らないとする心理には自身の血統に対する強い意識が働いている。薫の女一の宮への思慕は、繰り返し描かれてきた貴公子による高貴な女性の垣間見の形をとりながら、なぜここで母宮の血統と比較されるのか。出生の秘密を抱える薫にとって、いったい何が都での自尊心を支える基盤となるのかを明らかにするのが、本発表の目的である。

(同志社女子大学大学院)

薫と匂宮の「きよら」「きよげ」

——それぞれの容姿美と内面的美を手がかりとして——

下村 紗瑛

『源氏物語』では、「きよら」「きよげ」は明確に使い分けられており、多数の先行研究があるものの、未解明な点も残る。宇治十帖における二人の主要な男君である薫と匂宮については、薫の「きよら」は四例、「きよげ」が五例、匂宮の「きよら」は十例、「きよげ」が一例見られる。匂宮が主に「きよら」と形容される一方、薫は「きよげ」と形容されることが多く、その使い分けの理由は解明されていない。宇治十帖の薫・匂宮における「きよら」「きよげ」は、正編における光源氏とは異なる用法で対照的に語られている。薫よりも表面的な容貌美が優れており、専ら「きよら」とされる匂宮に対して、一段劣って「きよげ」と形容される薫は「はづかし」「心にくし」などの語と共に内面的価値が評価される。二人の優劣は周辺の人物評からも確認できる。本発表で

は、それぞれの「きよら」「きよげ」の使い分けを考察し、正編との語られ方の違いを明らかにする。

(名古屋大学大学院)

『夜の寢覚』の女君の心は「傷」だったのか

——平安期かな文学作品における心理的苦痛を表す言葉について——

前田 みどり

現代を生きるわれわれは、心理的な苦しみをしばしば「心が傷つく」という言い方によって表すが、この感覚は普遍的なものであるといえるのか。本発表では、平安時代後期に書かれた物語文学である『夜の寢覚』の女君に注目し、作品成立当時をきた人々が苦しみをいかに知覚していたのかについて考察する。『夜の寢覚』においては現存本文全体にわたって、男君との関

係が女君の心身に大きく影響しているが、男君との最初の一夜とその再体験に相当する場面からは、女君に精神的苦痛が「外傷」として知覚されていると判断できる例は見当たらない。本発表では『夜の寢覚』をサンプルに心理的な苦痛を表す言葉について論じることによって、フロイト以降発展してきた「トラウマ(心的外傷)」という概念からはこぼれ落ちてしまいがちな、平安時代の人々ももっていたであろう内的な感覚としての苦痛の認識のあり方に目を向けてみたい。

(早稲田大学大学院)

日本学術振興会特別研究員(DC1)

『狭衣物語』内閣文庫本と元和九年古活字本の文体差

——諸本対照コーパスを用いた異文調査——

野田 太暉

発表者は現在、『狭衣物語』の諸本をもとにしたコーパスを構築しており、内閣文庫本(深川本系、大系の底本)と元和九年古活字本(流布本系、全書の底本)のデータを公開している。『狭衣物語』は、異本が多数存在することでよく知られており、特にこの二本は最善本の議論で対立し、現在も決着に至っていない。本コーパスは、それらの異同の一覧性を確保し、本文の校訂や、作品の解釈に活用することを目指している。

本発表では、コーパスを活用した本文研究の事例として、用例数に顕著な差がみられる「めでたし」を中心語に、その前後にある語との結びつき(コロケーション)の計量的な分析を通じて、二本間の文体差を検討する。高度な検索や集計によって本文の異同を俯瞰的に捉え、従来の研究で直感的な印象として指摘されてきた文章表現

や人物描写の相違点を、より客観的かつ具体的に明らかにできることを示す。

(中京大学大学院)